

■香港中文大学との共同シンポジウムより

## メッセージ

池田大作

香港中文大学中国哲学文化研究センター、東洋哲学研究所、開設満十年の東洋哲学研究所香港センターの共催によるシンポジウムの開催を、心からお祝い申し上げます。

ご多忙のなか、ご列席いただきました大学者の諸先生方に深く御礼申し上げます。

「東洋文化と現代社会——儒教・仏教・道教による哲学対話」とのテーマの下に、東洋思想を専門とされる各分野の権威であられる先生方とともに、多様な観点から探求の論議を進めゆくことは、確かな指標を求

める二十一世紀を照らす英知の火となるでありましょう。それは、時とともに、いや増して輝きゆくであろうことを確信してやまないのであります。

顧みれば、私が初めて香港の地を訪れたのは、今から四十五年前の一九六一年一月。恩師である戸田城聖第二代会長の遺志を継ぎ、創価学会の第三代会長に就任した翌年のことでありました。この折、私は、香港の地を皮切りに、スリランカ、インド、ミャンマー、タイ、カンボジアの五カ国を訪れました。

東洋文明に触れる旅でもあったこの時、人類の共生

と世界平和の構築を目指し、「文明間対話」「宗教間対話」を推進しゆくためには、東洋をはじめとする世界の思想・哲学・文化を多角的に研究する機関が必要となることに思いをはせておりました。そして、釈尊成道の地であるブツダガヤで、東洋哲学研究所の設立を決意したのであります。

その香港初訪問から十三年後の一九七四年一月、創価大学の創立者として私は、初めて貴大学を訪れ、当時の李卓敏副総長と会見しました。私は両大学の教員・学生の相互交流を提案いたしました。

創立間もない創価大学との交流を、李副総長は快諾して下さり、翌年には貴大学との間に正式な学術交流協定が結ばれました。

以来、創価大学は、海外四十四カ国・地域の百大学と交流を広げるに至っておりますが、創価大学が初めて教育交流を結んだ忘れえぬ原点の大学は、他でもない貴大学なのであります。

私自身、一九九二年に貴大学におきまして「中国的

人間主義の伝統」とのテーマで講演を行わせていただきました。この折、私に対して最高客員教授の称号を、また二〇〇〇年には名誉社会科学博士の榮譽を授与して下さった貴大学のご厚情は、今も私の胸に深く刻まれております。

今回のシンポジウムもまた、貴大学との交流の歴史に新たな一頁を刻むものとなることを確信しております。

さて、中国学術界を代表する碩学であり、貴大学の終身主任教授であられる饒宗頤先生は、私の著書である『私の釈尊観』の中国語版に「序」を寄せて下さいました。

その「序」の中で、未来、来世に理にかなった安穩な生活をおくることを生きがいとするインド人と、孝道を重んじ、現実を重視する中国人の思考を対比させつつ、両者を融合させたものこそ仏教の中道精神であるとして、このように述べておられます。

「中国とインド両文化はその基盤から大きな懸隔が



香港中文大学でのシンポジウム（2006年11月23日、同大・祖堯堂で）

あって、本来交流することはたいへん難しいが、仏教の中道精神が図らずもこの二者を融合させることができた。東伝した仏教が大乗として花開き、多大な成果を残したことは、決して偶然ではない」と。

仏教の「中道」とは、快樂と苦行、有と無などの両極端に執着しない、中正の道をいいます。釈尊は、快樂主義、苦行主義の何れにも偏ることなく、偏見や極端を廃した生き方のなかに、正しい道である中道を求めたのであります。

仏教思想のもつ「中道」への志向性は、中国に入ってから、さらに展開されていきます。

吉蔵は「中」について、「中は実を以て義と為し、中は正を以て義と為す」と述べ、真実の正しい道をさすと定義しました。

また、天台は、「中道」思想を、空・仮・中の「三諦論」として論じました。

ここに「空」とは、人間をはじめ万物の内面世界をさし、「仮」とは、万物の現象面、顕在化した側面をさしております。そして「中」とは、内在面としての

「空」と、現象面としての「仮」の双方を貫きつつ、止揚しゆく根源的で真正・不変の道理をさしております。これを「中道」と呼びます。

ここで思い起こされるのは、私が二年前、饒宗頤先生から賜りました「中庸致中和」（中庸は中和に到る）との書であります。まさしく、古来、中国思想に流れる「中庸」「中和」の思想こそ、仏教の「中道」思想と通底する思考法であります。ともに人間の「中の徳」の表現といえましょう。

四書の一つである『中庸』の表題については、「偏らざるをこれ中と謂い、易<sup>か</sup>わらざるをこれ庸と謂う」と言われており、いずれにも偏らない天下の道理が「中」、永久に易わることのない天下の条理が「庸」であるとされています。

さらに、『中庸』には、「喜怒哀楽の未だ発せざる、之を中と謂う。発して皆節<sup>た</sup>に中る、之を和と謂う。中なる者は、天下の大本なり。和なる者は、天下の達道なり」とあります。

つまり「中」とは、喜怒哀楽の情となつて現れる前

の、偏りのない内面世界の「大本」をさし、その「中」が顕在化し、物事の節度に合致していき、「達道」となるところが「和」と考えられます。

先ほどの天台の「三諦論」との対比でいえば、ともに「中」とは、宇宙森羅万象の永遠なる大道をさしております。『中庸』では、その働きが内面世界から顕在化して、物事の節度に合致していくと表現しております。

一方、天台は仏教思想に基づいて、「中」なる永遠の道理が、内面世界（空）から現象面（仮）へと顕在化しつつ、極端にとらわれない調和、バランス感覚を保ちながら、万物の真正のあり方をさし示していくところを「中道」としております。

このように「中の徳」——中道、中庸の思想こそ、人間をはじめとする万物の「内面世界」と「現象世界」を貫き、止揚しつつ、<sup>レ</sup>節度の感覚<sup>ヲ</sup>を備えた真実の人間の生き方を可能にするのであります。

今日において、「中道」「中庸」の思想は、西洋物質

文明への偏重を是正し、東洋の精神文明との調和（和）をなしゆく「真正の道」（中）であり、両者を止揚しつつ、新たな人類文明を築きゆく「節度の感覚」に根ざした「総合智」であるといえましよう。

それ故に、トインビー博士との対談の締めくくりに私が、「二十一世紀の人類への提言は何か」と問うたとき、博士の答えは次のような意味のものでした。

「二十世紀において、人類はテクノロジーの力に酔いしれてきた。しかし、それは環境を毒し、人類の自滅を招くものである。人類は自己を見つめ、制御する知恵を獲得しなければならぬ。そのためには、極端な放縦と極端な禁欲を戒め、中道を歩まねばならない。それが二十一世紀の人類の進むべき道だと思ふ」と。

今回の「儒教・仏教・道教の哲学対話」から、より明らかにされる「東洋の智慧」が、人類の進むべき道の第一歩を明るく照らしゆくものとなることを願っています。

結びに、諸大学からご臨席賜りました諸先生方のますますのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます、私

のメッセージとさせていただきます。

（いけだだいさく／創価学会インタナショナル会長）